

蔵浜大学出版会

Title	斎藤葵と合理的選択 「選択」に関する予備的考察
Author(s)	ふおん
Citation	コネクト第一巻 (CONNECT Vol.1) pp.8-20
Issue Date	2017.08.11
Last revision Date	2019.09.12
Doc URL	http://kuradai-repo.fuon.jp/kup-0003.pdf
Type	article
File Information	KUP-0003

Instructions for use

斎藤葵と合理的選択

「選択」に関する予備的考察

1章 序論

斎藤葵は何故退部という「選択」を行ったのか。それ以外の選択は考えられなかつたのか。

斎藤葵の「選択」は、作品中でてくる諸選択・意思決定とは明らかに異質なものである。北宇治高校吹奏楽部という社会の中での選択は数多くあれども、社会から離脱するといった究極的とも言える選択は笠木希美と斎藤葵のみ¹である。また、笠木は最終的には復帰しているため、不可逆的な離脱と言ったものに限れば彼女一人だけである。何故彼女はそのような選択を行わなければならなかつたのか。

部長である小笠原晴香は、「あすかが部長やつたら、そしたら葵も辞めんかったのに」(1巻 p.157)と、条件付きではあるが、残留の可能性についてはあったかのように発言している。しかし、本当に彼女に残留という選択肢が存在していたのだろうか。また彼女は辞める際、部長の小笠原晴香に対して「私、のうのうと全国目指すなんて出来ない。去年あの子達辞めるのを止められなかつたのに、そんなこと出来ない。」と発言している。これは果たして本心からくるものであろうか。

¹ 数多くの南中出身の吹奏楽部員も含めば数は膨らむが、登場している人物の中では彼女ら2人だけである。

本レポートでは、斎藤葵が採った「選択」について、経済学や政治学と言った社会科学の分野で用いられている、「**合理的選択**」というパラダイムによってアプローチを試みる。

Topic 「合理的選択 (rational choice)」

合理的選択とは、行為者である個人が選択を行うに際し選択肢に対して評価（得られる効用によって数値化）し、評価した選択肢を比較（選好）して自身の効用を最大化する選択を行うことである。

行為者 A は選択肢 a, b, c に対して選好（関係）が完全に推移的（選択肢に順位付けが可能）であった時、例えば、 $a \geq b, b \geq c, a \geq c$ ($a \geq b \geq c$) であった時、行為者 A は効用関数を最大化、つまり合理的な選択を行っていることになる。

よって、合理的な選択アプローチを行うにあたり、彼女の選好について明らかにする必要がある。

次の 2 章では「選択」が行われる以前までの彼女の諸選択を通じて彼女の選好を明らかにし、3 章では明らかになった選好に基づいて「選択」について考察し、そして最終章で結論を述べることにしよう。

2章 斎藤葵の選好

ここでは、彼女が退部する「選択」が行われるまでの諸選択、あるいは状況を通じて、「勉強（学習時間）と吹部（部活）の両立」、「勉強（学習時間）」「吹部（部活）」の3つの選択肢が、彼女にとってどのような順位付けがなされているのかについて明らかにしていく。

ここで見るのは以下の4つの選択である。

- ・堀山高校を受験
- ・北宇治入学と吹部入部
- ・部の目標を決める際、京都大会に拳手
- ・居残り練習を行わず、予備校を優先する

1. 堀山高校受験

斎藤は北宇治高校を受験する前に、「京都府でも一、二を争う超進学校」（1巻 p.59）と称される堀山高校を受験している。背景には、彼女にとって高校選択とは「優秀な大学に行く」（ヒミツ p.49）ためであり、また「学校の先生だってみんなかかると言ってくれていた。」（ヒミツ p.49）とあるように、彼女の学力水準からみて堀山への受験は当然とも言える選択であった。

結果としては堀山への入学は叶わなかったが、この選択から言えることは、彼女にとって高校とは優秀な大学に行くためのものであり、部活動を充実させたいなどのそれ以上の価値は見出していないことが

わかる。また、自己の成績（あったであろう模試²の判定）ではなく学校の先生の評価を気にかけているあたりに、彼女は外部の人間からみえる自己の評価を重要視してことも伺える。

2. 北宇治入学と吹奏楽部入部

斎藤葵は前期選抜で堀山高校に落ち、中期選抜で滑り落ちの北宇治高校に入学³し、そして高校では以前からやっている吹奏楽部に所属する選択を行った。開始時期は不明であるが放課後に予備校に通うなど、学習時間の充実を図る彼女ではあるが、何故学習時間を削るような吹奏楽部⁴への入部を選んだのか。

そこには彼女の、中学時代に“思い込んでいた”自身への特別視が関係している。彼女は「小学校でも中学校でも、成績表は5ばかり」（ヒ

² 少なくとも校内の実力模試、あるいは業者テスト（例：五ツ木模試、V模試）。

³ 中期選抜の合否を巡っては諸説あり、（山城通学圏において）定員のうち上位85%は第1順位の中から受かるが、残り15%は第1順位と第2順位で決まる中期選抜の制度より、前期選抜で堀山高校探究科群を落ちた斎藤葵は、なおも中期選抜にて山城通学圏で一番の進学校を第1順位にし、第2順位に滑り止めとして北宇治にしたとする、「**北宇治第二順位校説**」（Column「斎藤葵と選抜試験」『川島緑輝と選抜制度』ふおん、2017）がある。

⁴ 吹奏楽に関しては「高校でもテナーサックスなんだね」（黄前久美子 2話）とあるように、高校以前から吹奏楽をやっており、吹奏楽に彼女は効用を感じているようである。

ミツ p.49) という自身の成績から「ほかの子と違って自分には才能がある」(ヒミツ p.49) と信じており、「部活をしていても成績は優秀」(ヒミツ p.49) とあるように、“部活をしていても勉強も出来ている優秀な——特別である——自分”という理想的な自己像が存在しているからである。

また、北宇治高校吹奏楽部は「……これはヒドイ」(1巻 p.11)、「関西大会どころか京都大会で金賞すら無理だ。」(1巻 p.12)、「あのレベルやったら府大会でも銀賞取れるかどうかやと思うよ。関西どころか、ダメ金すら無理そうやし」(川島緑輝 1巻 p.24)、「府大会では目指せ銀賞なんじゃないかな」(川島緑輝 1話) とあるように、非常にレベルが低く上位大会に進んで時間が取られる、あるいは高度な演奏技術の要求といったことも考えられない。よって、府大会までの時間消費と自己の実力で十分という「最低限度の部活動」であれば、吹奏楽部への入部によって失われる学習時間の効用よりも、吹奏楽部への入部によって得られる効用が上回ることが考えられる。

以上より、斎藤葵にとって、勉強と吹部の両立が可能であれば、勉強時間のさらなる充実よりも優位であるということである。

3. 部の目標を決める際、京都大会に拳手

斎藤葵は、滝昇が今年の吹奏楽部の目標を何にするか部員に決めるようにする際に、ただ一人「京都大会で満足」する方に拳手した。目標を全国大会にすれば、当然に以前と比べて練習量が増えるのが明ら

かであり、仮に関西あるいは全国に出場すると、学習に充てられるべき時間が部活動に割かれてしまうため、「最低限度の部活動」という彼女が許容している量を超過してしまう。また、彼女に求められる演奏技術も高度になるため、量的にも質的にも彼女にとって負担が増すことになる。

よって、京都大会で満足する方に挙手し、全国大会出場を拒否したことは、彼女の「最低限度の部活動」という吹奏楽部に求めていた価値観を実現するためであることがわかる。

4. 居残り練習を行わず、塾（予備校）を優先

サンライズフェスティバルに向けて運動場にて練習を行った際に、彼女は一人居残り練習を行うことなく、塾（予備校）⁵を理由にその場を後にする。

彼女にとって、勉強と吹部の両立はあくまでも規定の活動時間で行われるものであって、予備校（学習時間）の時間を吹奏楽部に割くということは彼女が求める「最低限度の部活動」から逸脱している。

「最低限度の部活動」が部活動の延長に勝っていることから、勉強と吹部の両立は部活動に優先していることがわかる。

5. 順位付けに関する総括

斎藤葵が「選択」を行うまで諸選択を通して、彼女が「勉強（学習

⁵ 主に小説では予備校と表記されるが、アニメでは塾と表記される。

時間)と吹部(部活)の両立、「勉強(学習時間)」「吹部(部活)」の3つの選択肢をどのように順位付けしているのかが判明した。

勉強と吹部の両立>勉強

勉強と吹部の両立>吹部

勉強>吹部

(※「最低限度の部活動」の状況下において)

以上より、

勉強と吹部の両立>勉強>吹部

であることがわかる。

完全で推移的であるため、彼女は「最低限度の部活動」がなされている時に限り、勉強と吹部の両立、つまり吹奏楽部に所属していることが彼女にとって自身の効用を最大化、合理的な選択であることが明らかになった。

3章 「選択」に関する考察

「私、部活やめます」(斎藤葵 1巻 p.150)

小説とアニメでは部活を辞める経緯が若干違うが、斎藤葵は滝、あるいは北宇治吹奏楽部の要求に応えることが出来ないと判断し、退部という「選択」を行った。「最低限度の部活動」の継続が不可能で「勉強と吹部の両立」が選択不可能な状況であり、「勉強」と「吹部」では「勉強」が優先される彼女の選好では、合理的な選択である。

しかし、選好では明らかに出来ない点が一つだけある。それは何故このタイミングで「選択」が行われたか、という点である。

彼女は「選択」を行う以前から、「前から悩んでいたんですが」(1巻 p.150)と退部を選択肢の1つとして考えていた。では、何故、サンフェス後という時期に行われたのであろうか。

それには、「今の部は去年とは違う」(斎藤葵 7話)と言うように、吹奏楽部に大きな変化が生じていたことが関係している。

北宇治吹奏楽部という「組織」と、斎藤葵と北宇治吹奏楽部という「社会」との関係を見ていくことにしよう。

1. 滝昇の組織経営

滝昇が北宇治吹奏楽部の顧問に就任する以前、あるいは就任直後は、吹奏楽部はパート練習時に一部の生徒が練習せずに遊んでいる、あるいは中川夏希のようにサボるなど部員の協働意欲は低く、「全国大会出

場」は北宇治吹奏楽部という組織の目標ではなく、単なるスローガンという有様であり、北宇治吹奏楽部は「組織⁶」と言うよりも「集団」という有り体であった。

しかし、滝が就任して以降、状況は一変する。彼は部員に部の目標を決めさせ、それが強制ではなく自ら決定したものであると念を押した。さらに、自らが共通敵となることで、部員間の連帯を強固にし協働意欲を高めた。さらに、他パートの前で悪い場所を指摘、また演奏レベルを率直に伝えるなど、今の北宇治吹奏楽部の状況が目標に対してどうであるのか情報共有に努め、吹奏楽部が「組織」として成り立つように運営した。

また、海兵隊演奏、サンフェスなどイベントに合わせて曲を指定し、「全国出場」という大目的を達成するための小目的を充足させ、それを1つ1つクリアしていくことで部員の満足度を高め、「組織」としての存続に努めた。

その結果、吹奏楽部は「コンクール金賞取るつもりで頑張ってる」（斎藤葵 7話）組織に生まれ変わった。

2. 斎藤葵とバランス理論

斎藤葵と北宇治吹奏楽部（社会）との関わり合いを見るにあたり、

⁶ バーナードによると、組織成立の3条件は「目的」「コミュニケーション（情報共有）」「協働意欲」であり、組織が存続するにあたり必要な2条件に「組織メンバーの満足」と「組織目的」の充足を挙げている。

ハイダーの「バランス理論」と呼ばれる社会心理学の概念を導入する。

Topic 「バランス理論」

これは P と O の二者間が問題 X (事象、人物) について考える時、P、O、X の関係がどう変化するのか、といったものである。

3 つの関係を考える時、初期の状態としては以下の 4 つが挙げられる。

- (1) PO は友好 (+) で、X については意見一致 (+)
- (2) PO は敵対 (-) で、X については意見一致 (+)
- (3) PO は友好 (+) で、X については意見不一致 (-)
- (4) PO は敵対 (-) で、X については意見不一致 (-)

※PO 間の友好は+敵対は-、X についての意見一致は+不一致は-で表す。

(1)は友好関係にある 2 人が問題 X について意見が一致している、また(4)は敵対関係にある 2 人が X について意見が一致していないため、これ以上関係が変化することはなく、バランスの取れた関係である。

一方、(2)は敵対関係にある 2 人が X について意見が一致しているため、また(3)は友好関係にある 2 人が問題 X について意見が一致していないため、PO の関係は不安定であり、PO の 2 者関係は、前者は

敵対から友好なものに、後者は友好から敵対に変化する、アンバランスな関係である。

ハイダーによれば、人間関係はアンバランスの関係からバランスの取れた関係に変化する傾向が強いとされている。その説明としては、(2)であれば、意見の食い違いや相互不理解、価値観の相違によって敵対していた関係が問題Xについて意見の一致を見せて敵対関係から解消されて友好関係に、(3)であれば、意見が一致し相互理解があり価値観が同一で友好だった関係が問題Xについて意見の不一致により友好関係が解消され敵対関係に、それぞれ変化するためである。

斎藤葵（P）と北宇治社会（O）をバランス理論で考えると、彼女が入部した当時から滝昇が顧問に就任するまでの間は、部の活動内容・目標（X）に対して両者とも本気で全国に行くなどとは思っておらず意見が一致、また「葵の部内での人望が見て取れた」（1巻 p.151）とあるように彼女と部員との関係は良好であるので、

PO (+)、PX・OX (+)

であり、バランスの取れた関係である。

しかし、滝が顧問就任後、北宇治社会あるいは部員全体としては「全国出場」に傾きつつあり、なおも彼女と部員との関係は良好（+）の関係であったが、部の活動・目標に対しては不一致（-）が起きており、状況変化によりアンバランスなものへと変化していた。

PO (+)、PX・OX (-)：サンフェス後

彼女が部活動に比重を置ける人間であれば、再び意見は一致し、バランスの取れた関係に戻るが、サンフェス以後彼女にとって「最低限度の部活動」の継続が不可能で「勉強と吹部の両立」が選択不可能な状況において、吹奏楽（部）を選ぶことは彼女に取って不合理な選択に過ぎず、そのままの状況でいるとバランス理論によれば部員との関係も嫌悪なものになり、孤立するおそれがあった。

また、「選好」の章で見ていた通り、彼女は外部からの評価を重視している面があり、部員からの自己への評価を下げるることは彼女にとって受け入れがたいものであった。

よって、北宇治吹奏楽部という社会が変化したのを受けて、これ以上の所属は彼女にとって利益ではなくなっていたことを感じ、退部を決断したのである。

4章 結論

斎藤葵は何故退部という「選択」を行ったのか。それ以外の選択は考えられなかっただけでなく、その他の選択肢も考慮されていなかったのか。そして何故サンフェス後に行われたのか。それらの間に対しても「合理的な選択」というアプローチを試みることによって一定の答えを導き出すことに成功した。

それは、彼女は「最低限度の部活動」という状況下においては「勉強と吹部の両立」、吹奏楽部に所属していることが合理的な選択であった。しかし、北宇治吹奏楽部が滝昇の登場により組織として、社会として変化し、以前のような「最低限度の部活動」では吹奏楽部の活動内容・目標を満たせず、量的・質的にもさらなる部活動を要求され、その要求に応えることが不可能であったため、退部を選択肢に入れ、そして社会が完全に変わり、所属する部員と目的が一致しなくなつたため、それ以上の所属は自己にとって不利益であることを感じ取り確信し、「選択」を行つた、という結論である。

補記（2019.09.12）

ザ・怪文書。正直なところその専門の方が見れば失笑ものではあると思うのですが、斎藤葵の選択、もっと言えば前作のうち「斎藤葵と選抜制度」を書いているうちに彼女自身に対して強い思い入れを抱くようになつたので自分なりの解釈として刊行いたしました。

誤解を恐れずに言えば「特別だと思い込んでいた」少女が、挫折とそして高校で「特別な人間」に出会い、全てを得られず、最も得たい

もの選択するしかない普通の人間として、どう行動しているのか、どんな原理に基づいて動いているのか非常に気になりました。

この本はあくまでも「合理的選択」という観点から彼女の行動を解き明かそうとしたに過ぎません。他のアプローチから描き出される別の「斎藤葵」という人物像も間違いなくあります。それだけはどうか心の奥底に秘めていただければ幸いです。

(「あとがき」『コネクト第一巻』蔵浜大学出版会, 2017 より抜粋加筆)

・参考文献

- 1 卷. 武田綾乃『響け！ユーフォニアム 北宇治高校吹奏楽部へようこそ』宝島社, 2013
- ヒミツ. 武田綾乃『響け！ユーフォニアム 北宇治高校吹奏楽部のヒミツの話』宝島社 2015
- 1話. 京都アニメーション『響け！ユーフォニアム』「第一回 ようこそハイスクール」2015
- 2話. 京都アニメーション『響け！ユーフォニアム』「第二回 よろしくユーフォニアム」2015
- 7話. 京都アニメーション『響け！ユーフォニアム』「第七回 なきむしサクソфон」2015
- ふおん 2017. ふおん「Column『斎藤葵と選抜制度』」「川島緑輝と選抜制度」蔵浜大学出版会, 2017
- イツァーク・ギルボア 松井彰彦訳『合理的選択』みすず書房 2013
- 橋本茂『交換の社会学』世界思想社, 2005
- M・ラムザイヤー、F・ローゼンブルース、河野勝 [監訳]『日本政治と合理的選択』勁草書房, 2006